

●学校支援情報●

# 岡崎むかし館通信

vol.8

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/libra/803/p014017.html>

郷土学習のヒントとなる情報を発信します。



あっという間に7月、そして夏休みですね。むかし館では夏休み子ども体験講座を開催します。大人の参加も歓迎です。今夏はクールシェアスポットの「りぶら」へお越しください。

## 郷土の素材いろいろ

— 活用・教材化へのヒント —

### 「千社札」の謎



この罫囲みを「子持ち枠」と呼ぶ

連札

「題名札」  
(貼札)

「交換納札」  
(色札)

今でも社寺を参拝すると、境内の門柱や天井に氏名が記された刷り札がよく貼られています。これは、千社詣することを表現した証として、参拝者が自分の生国・氏名・屋号などを記した札を、特別な工夫を施した長竿を用いて貼って回ったことによります。この納札行為が千社詣の代名詞のように伝えられ、千社札と言われるようになりました。

千社詣の風習は平安時代末からありましたが、江戸中期以降に庶民信仰の展開の中で、天愚孔平(千社札の考案者・江戸中期の儒学者・出雲松平家藩士)や江戸麹町の五吉などのグループにより、千社納札が流行し、都市独特の文化となっていました。

さて、千社札には大きく2種類あり、寺社納札用で墨刷の「貼札」と呼ばれる「題名札」と、多色刷でデザインにも凝った「色札」と呼ばれる「交換納札」があります。さらに、①紙の大きさ、②文字書体、③印刷方法などの作製上の取り決めもあります。そうした制約の中で、様々な意匠が凝らされた千社札からは、粋な江戸の庶民文化が感じられます。

ここ岡崎にも、「岡崎納札会」なる交換会が存在し、盛んに活動をしていた時期(大正7年から昭和10年頃)があります。一枚の千社札から、千社札の歴史と庶民信仰、江戸中期の庶民文化の広がり、近代社会を迎えた日本の地方都市のエネルギーなどを見つめ直すのも、地域を知る重要な手掛かりになると思います。【N】

## 岡崎市北部地域 「渡通津町」②ー山の水車を訪ねてー

継続的に岡崎北部を歩いていますが、今回は山間地の水車の存在と、役割について報告をします。かつて青木川流域には、数多くの水車の分布が認められました。これは、岡崎の基幹産業であった繊維産業(ガラ紡)の動力源としての水車でした。これに対して、日々の暮らしを支える精米機としての役割をもつ水車があります。[精米とは玄米から外皮などの(糠)を取り除き、白米にする作業。]水車精米は江戸期に中国から伝わった「唐臼」(三河地方の呼称:ダイガラウス・ジガラウス)と呼ばれる足踏み式の石臼を改良したもので、江戸中期から明治まで精米機を中心は水車でした。明治29年に動力式精米機が発明され、徐々に水車精米機の利用が減ります。

渡通津町を流れる霞川<sup>かすみ</sup>の人家が途切れるムラの入り口に、精米するため使われていた2基の水車の形跡が確認できました。1基は小屋のみが残り、もう1基は堰堤、石臼と、水車のシンボルである大輪の軸の部分が地中に埋まっていました。2基とも個人所有のものですが、渡通津町の人々で使用されていました。霞川の水力を利用した山の水車は昭和20年代中ごろまで稼働し、渡通津町の人々の暮らしを支えていました。【N】



水車小屋(渡通津町)



堰堤(渡通津町)

水車といえば、コトコトコットン〜の唄で知られる「森の水車」ですが、これは粉ひき水車です。水車精米は三州足助屋敷(豊田市)で稼働している水車を見ることができます。また青木川沿いでは、ガラ紡の水車の遺構を見ることができます。ぜひ探してみてください。

●編集/発行(隔月) 岡崎市立中央図書館・企画班 平成26年7月  
〒444-0059 岡崎市康生通西4-71 tel.23-3167 / fax.23-3165

開催中 【企画展「くらしの道具ー今と昔ー⑩涼む」 ~9/9】

《催事》 夏休み子ども体験講座・社会科自由研究相談会  
7/26(土)、27(日) ①10:00-11:30、②13:30-15:00(随時受付)  
むかし館の少し昔のくらしの道具を観察し、触れて体験!  
社会科自由研究相談会も同時開催!